

近江八景：栗津の晴嵐

栗津は、松の木で有名な大津内の地区です。琵琶湖の南端にあり、瀬田川と湖が合流する辺りに位置しています。東京と京都を結ぶ旧東海道がこのエリアを通り、瀬田の唐橋と大津の他の地域を結んでいます。そのすぐ北には、江戸時代（1603～1867 年）に徳川幕府によって建てられ、1868 年の明治維新後に破壊された膳所城がありました。

栗津の晴嵐を描写した絵の多くは、膳所城の堂々とした建築を全面に押し出したものですが、保永堂が出版した歌川広重（1797～1858 年）の有名な木版画では、湖上の帆船と海岸の松の木々に隠れて、城がほとんど見えません。現在、東海道は歩行を主とした道路ではなく、樹木や帆船もかつてほど多くはありません。しかし、節くれだった松の木々が立ち並び静かな公園が、今も湖岸線に沿って広がっています。かつて城があった場所は膳所城跡公園となっており、春には桜の名所として知られています。